

奈良の八味地黄丸

1) 富山県の配置薬業

私は薬剤師でありながら薬の歴史については疎いのですが、西暦57年に倭奴国王が後漢に遣使、607年に小野妹子が遣隋使として中国に派遣されているので、その頃から中国の医学は大なり小なり日本に渡ってきたと思われます。本格的には日本へ薬と共に中国の医学が入ってきたのは753年に唐から渡来した僧侶の鑑真によるとされています。当時の政治の中心は平城京だったので奈良を中心にして薬の文化が発達したと思われます。さらに794年に平安京に遷都したため薬の文化も京都に移行し、さらに薬種商が始まったのは記録の時代は離れますが1453年の室町時代からとされています。

富山は配置薬業(売薬さん)で有名ですが、江戸時代の富山藩の第2代藩主前田正甫(マサフ)は当時から自身が腹痛の持病があったため既に存在していた胃腸薬の反魂丹を基にして富山の反魂丹を開発したとされ、彼が江戸城参勤の時に他の藩主が腹痛になり反魂丹を服用させると直ぐに腹痛が治ったところから富山の反魂丹を全国に広めて欲しいという要望があったのを機に全国への売薬・配置薬産業が発達したとされています。そのため配置薬を製造する中小の製薬会社も富山県には多いのですが、取り扱う医薬品は第2～第3類医薬品になるため、近年では薬局、ドラッグストアなどで販売されるようになり配置薬業者数も一気に減少してしまいました。配置薬を製造する製薬会社も医療用医薬品の原料を製造する会社へのシフトしているようです。どこの分野での栄枯盛衰があるのが世の常のようです。

2) 京都と奈良の配置薬業者さん

2011年だったと思いますが大学病院時代の元上司から京都の配置薬業者さんの学習会講師の代役をしてくれないかという頼みがありました。以前から講師をしていたようですが趣味のスキーに行った際にゲレンデではなく駐車場で転んで骨折して急に行けなくなったとのこと。何人かに代役を当たったようですが急な事で断られ、最終的に私に役が回ってきたわけです。配置薬業者さんの学習会に興味があったのと久しぶりに京都見物もできると思い「はい」か「YES」か「喜んで」のノリで請け負ったのですが、その際に渡された資料は「登録販売者試験問題作成の手引き書」でした。配置薬業者さんも登録販売者の資格が必要になったという時代でそのための学習会だったわけです。「責任重大じゃないですか!」と言ったものの元上司はそこまでの認識はなかったのか「とにかく今年だけは頼む」とだけ。京都に着くと待ち受けていたのは高齢者の人ばかり。話を聞くと登録販売者の制度ができたため、従来から配置薬業者の実績のある人達には登録販売者試験を免除される代わりに1年に4単位の講習会が必要になったとのことで私はその講師役の一人というだったというわけです。ほぼ1日のハードスケジュールでしたが、その後も4年間ほど元上司ではなく私に彼らからご指名がありました。その理由が「前の講師は元大学教授かもしれんが我々には訳が分からん話を長々と話して退屈だったがあんたの話は面白い」とこと。元上司には悪いとは思いましたが甘んじてお受けしたわけです。さて、

実は京都の配置薬業者さんには富山県出身者が多くいます。「私は富山県の〇〇町の出身で」と富山弁丸出しの人も何人かいましたし、富山出身の80歳代の人で現役の人もいました。比較的若い人もいましたが彼らは純粋な配置薬業だけではなくドラッグストアなどを手がけているような印象がありました。京都になぜ配置薬業が?と思いましたが、奈良から京都へ移った薬の文化的背景や富山よりも人

口の多い京都へ移った方がより利益がでるといふ思惑があつたのかもしれませんが。ただ彼らの話によると奈良には京都とは違ふ独自の配置薬業文化があると言ひます。私の推測に過ぎませんが富山の配置薬業は富山藩の強いバックアップもあつて恐らく全国的に展開したと思ひます。一方、奈良には最初に薬が伝わつてきたという歴史的背景やプライドもあり独自の配置薬文化が発展してきたのだと思ひます。

先日新聞の広告記事を見ていると(株)奈良大和生薬の「奈良八味地黄丸錠」というのがありました。その会社のホームページを見ると「尿漏れに効く。頻尿に効く。夜間尿に効く」とあります。八味地黄丸の適応の最たるものになりますがエキス含有量は医療用の**1/2量**(2200mg)で1日2回食前または食間の服用になっています。当ニュース464号で紹介した八味地黄丸エキスのハルンケア®は**満量**処方でしたので半量処方は何%の人に十分な効果を与えてくれるのか?が疑問に残る医薬品になります。が、この問題はここまでして八味地黄丸の復習をしてみます。

ちなみに富山県では元々「くすりの富山」の看板を掲げていましたが、さらに「くすりのシリコンバレー」にしようとする計画を立てています。ジェネリック薬不祥事の大手の最初となつた日医工の印象を少しでも拭おうという作戦でしょう。さらに富山市がニューヨークタイムズ紙で「今年行くべき都市の30位」に何故か?指名されたので少しでも良いイメージを植え付けたいものです。

3) 八味地黄丸とその関連方剤について

八味地黄丸の主薬は**地黄**でゴマノハグサ科アカヤジオウの根になります。その作用は血を補ひ血の熱を冷まし**腎の機能を改善**するとされます。寺澤捷年著「症例から学ぶ和漢診療学」から引用すると、体を構成する成分は目には見えないエネルギーの**気(陽気)**と赤色の液体の**血(≒血液)**と透明の液体の水(≒免疫成分を含む組織液)を足し合せた**陰液**のバランスで体調が保たれているとしています。八味地黄丸は臓器のうち特に**腎が弱くなつた状態(腎虚)**を治すとされます。**腎の陽気が衰え**ると精神活動の低下、性欲の低下、骨の退行性変化、視力・聴力の低下、浮腫、夜間頻尿などの症状が出て、**腎の陰液が衰え**ると全身倦怠、目の乾燥感、口渇、四肢のほてり、皮膚の乾燥などの症状が出るとされます。そこで地黄を主薬にした腎虚の代表的な3つの方剤を以下に紹介します。

①八味地黄丸(別称: 八味丸、腎気丸)

地黄、山茱萸、山薬、沢瀉、茯苓、牡丹皮、桂皮、附子の**8生薬**で構成される方剤で**腎の陽気と陰液が共に衰えた**病態に使われます。両方の症状を伴いますが、特に腰部と下肢の脱力感・冷え・しびれがあり、さらに夜間の頻尿を中心とした排尿異常症状に利用されます。

②牛車腎気丸(別称: 牛車八味丸)

八味地黄丸(腎気丸)に**牛膝**と**車前子**の2つの生薬を加えた**10生薬**で構成される方剤で腎の陰液よりも**陽気が衰えた**病態に使われます。八味地黄丸と病態は似ていますが、尿量減少、夜間尿、浮腫、腰痛などが著明な場合に選択されます。牛膝は血行を改善すると共に腎の機能を回復させ利尿作用により排尿困難を治す作用があり、車前子は利尿作用により排尿障害を治す作用がありますから牛車腎気丸は八味地黄丸より体の中に水分を貯留した病態に適する方剤だと理解できます。

③六味地黄丸(別称: 六味丸)

地黄、山茱萸、山薬、沢瀉、茯苓、牡丹皮の**6生薬**で構成されます。八味地黄丸の構成生薬から**桂皮**と**附子**を抜いた方剤になります。この方剤は陽気よりも**腎の陰液が衰えた**病態に使われます。多尿、夜間尿、残尿感など上記2方剤と共通した症状もありますが、口渇、手のひらや足の裏のほてりなど陽気が優勢な症状がでます。このあたりが上記2方剤と異なる点になります。桂皮は気血の巡りを良くする体を温める温性の生薬、附子は鎮痛効果と体を温める効果の強い大熱性の生薬でこれら2つの温性の生薬が抜かれていることから六味地黄丸は腎虚を改善する方剤の中でもほてりを和らげる方剤だと理解できます。

(終わり)